公將軍印全集

第三卷

谷崎潤一郎全集　第三卷
定價一五〇〇圓
昭和四十二年一月十一日印刷
昭和四十二年一月二十五日發行
著者　谷崎潤一郎
發行者　宮本信太郎
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

創造　一
華魁　二七
法成寺物語　四一
お才と巳之介　二二
獨探　三九
神童　二五
鬼の面　三六九

創

造

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大正四年四月號「中央公論」

一

「兄さん今日は。久し振りで伺ひましたがちよいとお目に懸つて行きたいんです。此處をあけてもよくつて？」

「誰だ、綾子か。まあ這入るがいゝ。ほんたうに久し振りだな。」

「えゝ、實は宿と一緒に北の方へ旅行に行つて昨日歸つたばかりですの。それにしても東京はすつかり春になりましたわね。」

「さうさ、もう三月の半ばだからなあ。」

「此の暖いのによく兄さんは斯うやつて、部屋の四方を締め切つて、ぢつとして居らつしやるのね。そんなに仕事がおありになるの。」

「うん、ない事もないよ。」

「だつて別段働いて居らつしやる樣子はないぢやありませんか。」

「働く前に考へて居るのさ。仕事はしないでも、兎に角かうしてアトリエの中に立て籠つて考へて居れば、そのうちには素晴らしい思想が浮ぶだらうと思つて居るのさ。實は今、お前の這入つて來るちよいと前に少し思想が浮びかけた所なんだ。」

「どんな思想なの？」
「どんな思想つて、さう簡單には云はれないよ。またそのうちに立派な藝術にして見せるから、氣を長くして待つて居るがいゝ。何しろ仕事が大計劃だから、大分手間がかゝりさうだ。」
「しかしほんたうに結構ですわね。此の四五年間あなたがさつぱり製作を發表なさらないもんだから、世間ではもう川端も時勢に後れて老耄してしまつたんだなんて云つて居ますわ。あたしは兄さんの惡口を聞く度び毎に、何だか口惜しくつて仕樣がなかつたわ。」
「馬鹿だなお前は。世間の奴等が何と云つても己を信用して居れば口惜しがるには及ばないぢやないか。己はまだ三十六だぞ。今から耄碌して溜るもんか。――――けれども事に依つたら、お前もやつぱり世間の奴等と同じやうに己を理解する力がないかも知れないな。其れも此れも、いよ〳〵己の藝術を作り上げて見れば判る事なんだ。」
「兄さんがさう仰つしやるくらゐなんだから、それは餘程自信のある、非常な傑作なのでせうね。」
「まあ今迄の日本には嘗て現れた事のない傑作のつもりだ。己の拵へたものが日本一の創作になるだらうと思つて居るんだ。己の今度の藝術はほんたうの意味でのクリエエションなんだ。」
「でも西洋の藝術にはかなはないんですか。」
「己がどんなものをクリエエトしても、とても西洋人にはかなはないよ。日本人は當分の間、到底藝術を以て西洋人に打ち勝つ事は出來ないと云ふ、己は堅固な迷信を持つて居る。」
「さうして出來上つたら、今年の秋の文展へでも出品なさるおつもりなの。」

「今年の秋なんて、そんなに早く出來るやうな代物ぢやないんだ。何しろ己のライフ、ウオオクなんだから、今のところでは何年かゝるか解らないけれど、出來上つても文展なんかへ出品する譯には行くまいよ。」

「そんならまあ出來上るのを樂しみにして、氣長にお待ち申しますわ。――それからね、ライフ、ウオオクで想ひ出しましたが、あたし今日は兄さんにちつとお話しがあつて參りましたの。」

「なんだい。」

「又例の相談かつて云はれるかも知れないけれど、兄さんのお身の上の事に就いて……。」

「結婚をしろと云ふんだね。」

「えゝさうよ。それに丁度適當な方が見付かつたから、今度こそは是非ともお勸めしてうまく纏めたいと思ふんですの。ねえ兄さん、いくら耄碌なさらないでも、もう三十六におなんなすつたら、いゝ加減に身を堅めた方がよくはなくつて。」

「折角だが今度も亦お斷りしよう。今度ではない、結婚の話だけは一生お斷りするとしよう。お前も知つて居る通り、己は一遍妻を持つてほんたうに懲り懲りしたんだから。」

「ですけれどあの時分のあなたとは、あなたも違へば相手の女も違ひますわ。今度の人ならT子さんとは比べ物になりはしないわ。」

「相手の女は違つたにしても、己の方は少しも變らないんだから駄目だよ。T子と離別して以來、藝術家――そのうちでも殊に己のやうな藝術家は一生獨身を通すに限ると云ふ事を、ちやんとモツトオにして

しまつたのだ。」
「それでもさうやつて獨りで居らしつたら、時々淋しいと思ふ事がありはしなくつて？」
「そんな時には妻でない女の處へ遊びに行くさ。さう云ふ種類の女の友達を己は二三人持つて居るから、別に不自由なことはないよ。女は友達に限るもんだな。一軒の家に同棲して居ると仕事も何も出來やしない。」
「だつて兄さんは今まで五六年も獨身で居らしつた癖に、其の間何もなさらなかつたぢやありませんか。」
「其れあやつぱり以前T子と結婚した時の打擊が續いて居た所爲なんだ。結婚するまでは、己の頭には奔放な思想が自由に湧いて無數の創作が出來たけれど、あれ以來己の心は眠つたやうに働かなくなつてしまつた。此の頃になつて漸う打擊の傷が癒えて、新しい藝術の光が眼の前にちらちらするやうになつたんだ。」
「それぢや兄さんは、若しも此の後ある人と眞面目な戀に落ちるやうなことがあつても、やつぱり結婚なさらないお積りなの。」
「女を戀する事なんか此れから先にありさうもないよ。己の戀は今のところ己の藝術を對象にして居る。藝術より外に戀ひしいものはなくなつて居る。女は食物と同じやうに、唯性慾を滿足させるために時々攝取すれば澤山だ。」
「いつか兄さんはこんな事を仰つしやつたでせう。――戀と女と藝術とは自分に取つて全く一つものだつて。藝術家の一番貴い仕事は人生を其のまゝ藝術に化する事だつて。ねえ、さう仰つしやつたでせう。」

「云つたかも知れん。」

「あの時分と今とは、大分兄さんの藝術觀が變つてしまつたんですね。」

「さうだ、少し變つたやうだ。――正直を云ふと己の根本の藝術觀は變らないんだが、己は自分自身の力量や境遇に考へて見て、とても自分の人生を藝術化する事なんか出來ないとあきらめてしまつたんだ。それで自分の人生と、自分の藝術と云ふものを全く別々に取り扱はうと思つて居る。自分の實生活はどんなに卑しく醜くつても、自分の作る藝術だけは非常に貴く美しいものにしたいと思つて居る。」

「何だかあたしにはよく解らないけれど、それぢや兄さんの藝術と云ふものは、人生や實生活とはまるきり關係のないものなの。」

「關係は大いにあるさ。今に己の創作が出來上つて見れば解る事だが、世界中のどの藝術よりも、己の藝術が一番人間の實生活に關係の深いものなんだ。己はたゞ、自分の人生を直ちに藝術化する事を、あきらめてしまつたゞけなんだ。己には美しい容貌がない。立派な肉體がない。巨萬の富がない。――己のやうな醜い、貧しい、何等の資格をも持つて居ない人間が、藝術的の人生を造らうなどゝ思つたのが間違ひなんだ。」

「ひどく悟を開いてしまつたのね。妹の口からをかしいけれど、兄さんは何もそれ程醜い顏つきや體つきぢやなくつてよ。まあ十人並ぐらゐのところだわ。それに『富』の方だつて、巨萬と云ふ程ぢやなくつても、兎に角世間の人が羨む程の、何萬と云ふ資產を持つて居らつしやるでせう。」

「役に立つ程でもないが、資產は少し持つて居る。しかし何より悲しいのは己の此の醜い顏だ。醜い肉體

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だ。……そら、あすこの鏡に映つて居る己の姿を御覽。何と云ふ光の鈍い、淺薄な瞳の色だらう。何と云ふ下品な不恰好な鼻の形だらう。黄でもなく、白でもなく、黑でもなく、何と云ふ曖昧な不愉快な皮膚の色だらう。あの頰骨のいやに尖つて突き出て居る工合を見ろ。それからあの不細工な肩を見ろ。ちつぽけな吝臭い胴を見ろ。貧しい兩腕の筋肉を見ろ。哀れな短い脚を見ろ。あの體中の何處かの部分に少しでも美と云ふものが認められるかお笑ひ草に搜して見ろ。苟くも美術家と名のる人間が、こんな醜い形體を持つて生れて、どうして自分の肉體に反感を抱かずに居られるものか。」

「だつて兄さんのやうに、體の小さい事や鼻の低い事や肌膚の色まで詮議なすつたら、大概の日本人はみんな駄目になるわ。」

「さうさ、大概の日本人はみんな駄目さ。己はお前の云ふ通り十人並かも知れないけれど、大概の日本人が駄目だから從つて己も駄目になるのさ。若し人生其の物を藝術化させようと試みるならば、己を始め一般の日本人は先づ貧弱な體質からして直してかゝらなければ無意味な話さ。よく雜誌の口繪や活動寫眞などに、日本人が多勢並んで寫つて居る光景があるだらう。あゝ云ふ寫眞を見せられると、日本人程暗黑な、卑賤な、非美術的な形態を持つて居る種族はないと思ふね。西洋人は無論の事だが、獅子だとか羊だとか鳩だとか鷗だとか云ふ禽獸の類ですら、澤山集れば其處に一種の美感を生ずるものだけれど、日本人の顏だけは集まれば集まる程醜惡の度を增すばかりなのはをかしいぢやないか。美しい自然の中から美しい藝術が生れるとしたら、とてもわれ〳〵日本人などの間から立派な繪畫や彫刻が生れる筈はないやうな氣がする。」

「大分話が横道へ外れてしまつたやうだわね。さう云ふ議論はいづれゆつくり伺ふとして、もう一度結婚の問題に復らうぢやありませんか。」

「けれども此れが結婚問題に關係があるんだよ。――――己はT子と結婚するまでは、自分の資格に就いて可なりの己惚れを持つて居た。兎に角自分は非常に美しくはない迄も、十人並の器量を持つて居る上に、相當な富の力を備へて居るのだから、自分の人生を材料にして、美しい戀の藝術を作れるだらうと信じて居た。若しもT子と結婚して、理想通りな藝術的生活を營む事が出來たなら、己はもう繪などを畫く必要はない。自分の生命を創作するだけで立派な第一義の藝術家になり得ると思つて居た。ところがT子は結婚してから間もなく己を捨てゝしまつた。己を捨てゝSの所へ走つてしまつた。さうして今でもSと睦しく同棲して居る。あの當時は恨んだり怒つたりしたけれど、今日になつて考へれば、己はT子の執つた行爲を少しも無理だとは思はない。成る程Sの所には己の家程の財産はないだらう。しかし彼奴の顏はどうだ、彼奴の肉體はどうだ。こゝにSの寫眞があるが、まあ此のパツチリとした瞳を見ろ。豐かな腕の肉を見ろ。生き生きとした唇の色を見ろ。それから氣高い、威嚴のある鼻つきを見ろ。此の男だけはたしかに日本人のうちでも例外の方だ。T子が己と同等の審美眼を持つて居るなら、醜い己を捨てゝ美しいSの所へ走つたのは寧ろ當然の撰擇として許してやらなければならない。」

「それは兄さんが少し僻んで居らつしやるやうだわ。T子さんは勿論Sさんの美しい顏立ちに迷はされたには違ひないでせう。しかしあの人が兄さんを嫌つたには、まだ其の外に大事な原因があるんですわ。――――此れは彼の人が其れとなくあたしにほのめかした事ですけれど、兄さんは女に對して非常にアブノル

マルな病的な刺戟を要求なさるんださうですね。それをT子さんは恐ろしがつて嫌つて居たのです。兄さんと同棲して居ると、いつ何時命を落すか解らないつて慄へて居たのです。」

「それもやつぱり己が醜いせゐなのだ。己の肉體や容貌に、あの女を迷はせるだけの魅力がなかつたせゐなのだ。若しも己がSのやうな、或はS以上の誘惑に富む肉體を持つて居たら、あの女は己の魅力に醉つてしまつて、どんな要求にでも服從したらう。命を落すのを恐ろしがる暇はなかつたらう。……さう考へると己は今迄の己惚れや希望を一時に失つてしまつたのだ。己のやうな醜い肉體を持つた者はたとへ女を戀ひしたところで、到底自分の望むやうな絢爛な生命の藝術を編み出すことはむづかしい。再び此の世に生れ變つて立派な資格を備へて來るか、己自らが造物主となつて理想通りの美しい人類をクリエエトするか、孰方かでなければ己の幻覺に適合するやうな、艶麗な肉體の咲き匂ふ世界、奇怪な戀愛の許される世界、芳烈な色彩の流れ漂ふ世界は、現在の自分の能力でとても築き上げる事が出來ないと悟つたのだ。そこで己は女を戀する勇氣がなくなつた。先も云ふ通り、女は唯性慾を滿足させる日用品として時々使用するだけに止めてしまつた。」

「さう云ふ譯なら、あたしは何も女を戀しろとは申しませんわ。ですが兄さんどうでせう。――戀愛と云ふやうな意味でなく、經濟的に慾望を滿足させる日用品として妻をお持ちなすつたら。」

「お前はをかしな女だな。結婚しないでも濟んで行くものを、其れだけの理由で妻を迎へる必要はないぢやないか。」

「あたしは必要があると思ふわ。それだけの理由と仰つしやるけれど、外にもまだ大切な理由があるんで

すの。――兄さんはお父様のお遺しになつた川端家の財産や血統と云ふものを、一體誰にお譲りになるおつもりなの。たツた一人の妹のあたしは他家へ嫁いてしまつたし、兄さんに子供がなかつたら、川端の家は斷絶してしまふぢやありませんか。あなたはお父様へ對する務めとしても、結婚をして子供を生まなければ濟まないと思ふわ。」

「己は世の中へ自分の藝術を遺して行けばそれで澤山だ。子供なんかを遺して行く必要はないよ。」

「血統が絶えても構はないと仰つしやるの。」

「うん、……何もそんなに眞面目になつて詰問しなくつてもいゝだらう。己に云はせると、結婚するのはまだいゝとして、子供を生む事が一番いやなんだ。己は藝術を創作する職業を持つて居るんだから、己のやうな醜い人間を、一人でも餘計此の世の中へ作りたくない。こんな卑しい肉體や容貌は、自分一代で此の世から根絶してしまひたいと思つて居る。よく世間では器量の悪い男と女が結婚して、耻づる色もなく愛し合つて居るものだが、あんなのを見ると己は非常に腹が立つよ。殊にその醜悪な夫婦が、醜い上にも更に醜い子供を生んで、二人の間の寶物のやうに可愛がつて居るのがあるが、あれなんぞは全く親の氣が知れないよ。あんな夫婦が多いから、日本人はいつまで立つても立派な人種になれないんだ。」

「隨分御挨拶だわね。あたしだつて子供があるんですから、少しお手柔かにお願ひしたいわ。」

「何もお前にあて付けて居る譯ではないが、實際よくも親たちが愛憎をつかさずに居られるものだと思はれるやうな、醜い子供が澤山居るぢやないか。どうして世間の親たちは、美しい他人の子よりも醜い自分の子の方が可愛いゝんだらう。己が親だつたら、たとへ自分の子供でも醜い奴は奴隷のやうに虐待して、

美しい他人の子供を養育するなり、可愛がるなりしてやるがな。」
「一遍親になつて見れば、なか〳〵さうは行きませんわ。」
「だから親になるのは嫌だと云ふのさ。親と云ふものは醜いものだ。耻かしいものだ。藝術家には眞似の出來ないものだ。」
「親の攻撃はもうそのくらゐで澤山だわ。」
「その代りお前の方でも、己に結婚の忠告をする事だけは止めて貰はう。」
「え丶止めませう。それ程に仰つしやるなら、もうあきらめて了ひませう。――ですが兄さん、いよ〳〵あなたが結婚なさらないと極まつたら、内の家名と財産とはどう云ふ風に處分なさいますの。」
「事に依つたら、己は養子を貰はうかと思つて居る。」
「成る程それがい丶でせう。さうして何處からお貰ひになるの。親類から？」
「親類なんか眞つ平だよ。」
「だつてあかの他人よりはい丶ぢやありませんか。親類の子供ならば、未だしも血統が殘る譯だわ。」
「血統は絶えても仕方がないさ。」
「それでは誰か、適當な養子をお見付けなすつたの。」
「まだ見付けないが、此れから大いに骨を折つて、捜し出さうと思つて居るんだ。」
「どう云ふ人が兄さんのお氣に召すんでせう。あたしも心掛けて捜して上げるわ。」
「少し注文がむづかしいから、己が自分で捜さなければ駄目なんだよ。――己の今度の創作に大變な影

響のある事なんだから。」

「何だかをかしな話ね。養子をモデルにして繪でも畫かうと云ふおつもりなの。」

「いづれ其のうちに分るだらうから、詳しい說明は控へて置かうよ。兎に角今度の創作は、己の理想通りな、ほんたうに血あり肉ある生命の藝術をクリエエトするのだ。分つたかい。」

「分らないわ。」

「分らなければもう少し默つて見て居るがいゝ。」

二

（其の年の秋の會話）

「先生、それでは此れから、僕はあなたをお父樣と呼ばなければならないんですね。」

「いゝや矢張り先生と云ふがいゝ。己はお前に此の川端の家を繼がせる。しかしお前にお父樣と呼ばれるやうな、血緣もなければ資格もないのだ。お前のやうな高貴な容貌と端正な肉體を持つた人間が、醜い己を父と呼ぶのはあまり不釣合だ。あまり不適當だ。お前を此の世に生んでくれた眞實の兩親でさへ、お前を子に持つ資格はないんだ。」

「どう云ふ譯で？」

「あの親達はお前のやうな子を作りながら、惜し氣もなく養子に寄越してしまつたぢやないか。其れが何より親の資格がない證據だ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com